

聖徳太子信仰と「太陽の道」

—二上山を巡る竹内街道の思想と信仰—

藤 谷 厚 生

聖徳太子信仰の萌芽は、すでに奈良時代に見ることができ、『上宮太子菩薩伝』や平安時代に成立する『聖徳太子伝暦』などの伝記資料が、その先駆と位置づけられているということは周知の話である。しかし、実際の太子信仰の進展は平安時代中期以降に見られ、それは主に念仏聖たちによる一信仰形態として、日本仏教の展開の中では極めて重要な意味を持つと考える。本稿は、特に聖徳太子信仰の拠点である二上山の東に存在する叡福寺の太子廟、浄土信仰のメッカでもあった當麻寺(当麻寺)、さらに極楽の東門として位置づけされた四天王寺を結ぶ大阪から二上山を巡る竹内街道に焦点をあてながら、古代から中世に見られる思想的、信仰の変遷の特徴に論及しようとする一研究考察である。

キーワード：聖徳太子信仰、太陽の道、二上山、竹内街道

1、「太陽の道」と二上山

奈良の写真家であった小川光三氏が、自らの著書『大和の原像』(大和書房・1973年)で北緯34度32分のライン上には、箸墓古墳を中心に東西に太陽信仰の遺跡や神社が連なっていることを指摘され、そのラインを「太陽の道」と呼んだ。このラインの幅を100メートルほどの帯に見立てれば、そのライン上には西は淡路島の舟木石上神社、伊勢久留麻神社、また大阪府堺市にある大鳥大社、大阪と奈良の県境にある二上山、さらに奈良県田原本町の多神社、桜井市にある箸墓古墳や三輪山、東には長谷寺、室生寺、三重県多気郡明和町にある斎宮杜(跡)などが一直線に並んで位置する。

またそのラインの幅を数百メートルと仮定すると、さらに多くの宗教的な遺跡や神社仏閣がそのライン上に位置することとなる。小川氏が、この「太陽の道」を主張したのは70年代前半であったが、後に水谷慶一氏によってNHKスペシャル「知られざる古代—謎の北緯34度32分をゆく」(1980年2月11日)と題した番組が放映され、この「太陽の道」は一躍全国的に有名となった。

ところで、竹内街道さらに横大路は、いわば古代の官道として歴史に登場する大阪から奈良に続く道であるが、実はこの街道は「太陽の道」に平行して走っていることが分かる。そういった点から言えば、竹内街道は物流や政治的な意味によって整備され造られた道ではあるが、同時にそれは古代の思想や信仰と大いに関係している道でもあると言えよう。また一部の歴史家は箸墓古墳をこの「太陽の道」の中心ポイントと考えているようではあるが、実は宗教的に

はこのラインの重要なポイントは、二上山（二子山）にあることも、特に本稿では指摘しておく必要があると考える。

2、古代の宗教観と「太陽の道」

「太陽の道」の上にある三輪山は、古来から神奈備山と呼ばれ、山自体が神格をもった自然神崇拜の対象として人々に尊崇されている古代信仰のポイントでもある。この「カンナビ」という言葉については、学者によって多くの解釈があるが、その一つに「鉄穴」と関係する語とされる考えがある。古代祭祀の研究者である真弓常忠氏は、その著『古代の鉄と神々』（ちくま学芸文庫・2018年）の中で、

「砂鉄による製錬は、まず砂鉄をふくむ山を選ぶことから始まった。この砂鉄をふくむ山を『鉄穴山』といい、砂鉄を採る作業を『鉄穴流し』といい、そこで働く人びとを『鉄穴師』と呼ぶ。鉄穴師は砂鉄分の多い削りやすい崖を選んで山から水をひき、崖を切り崩して土砂を水流によって押し流し、砂鉄を含んだ濁水は流し去り、重い鉄砂は沈むからこれを採ってタタラ炉に入れて製錬する。……この『鉄穴』はいずれも『鉄穴山』、すなわち砂鉄の採取地を意味する。」

と述べ、また「鉄穴」の用語は『続日本紀』の記事にも見られることを指摘している⁽¹⁾。そして同氏は、「神奈備山」こそ砂鉄の採れる「鉄穴山」のことでありと主張する。また『古代の鉄と神々』の中で、

「オオナムチの神は、またその現実的行動により^{おおくにぬしのみこと}大国主命という名を生じ、国土開拓の神として記紀の説話に展開するが、その始源にさかのぼれば、砂鉄を採取する『鉄穴』より発想された『大穴牟遲』『大穴持』に原初的性格をみることができる。」

と述べ、三輪山に祀られる大国主命の別名である「オオナムチ」（大穴牟遲・大穴持）の名称は、「鉄穴」から派生した語であり、本来は製鉄に関与する神であったことを示唆している⁽²⁾。

さて、この神奈備山として古くから尊崇されている三輪山上（447m）には、南向きに高宮神社（日向神社）があり、ここには日向御子神が祭神として祀られている。その東側の杉並木の中に奥津磐座の岩石群が存することから、この地が古代の太陽信仰の聖地と考えられたのであった。

ところで、この三輪山の麓にある大神神社には、^{おおみわ}大国主命（大穴牟遲）の^{さきみたま}幸魂、^{くしみたま}奇魂が祭神として祀られている。二上山は三輪山の麓から真西に位置し、春分・秋分の日にはここからみて二上山の山の谷間に夕日は沈む。一方、この二上山を越えた大阪側（河内）には、^{みくくるみたま}美具久留御魂神社（通称：喜志宮）があり、ここに



図① 二上山に沈む夕陽（当麻町）

は大国主命の荒魂あらみたまが祀られており、同じく春分・秋分の日には二上山の谷間から太陽は昇るといふ光景が見られる。この喜志宮もまた神奈備山とされ、拝殿西側にある裏山（丘陵には古墳が存在）自体が三輪山と同じくご神体とされている。このように二上山を挟んで奈良、大阪に大国主命の御霊を祀る神社が東西に対称的に存在するのである。神奈備山や大国主命が、鉄の製錬と関連するという真弓氏の説を考慮すると、この東西に結ばれるポイントは古代社会を考える上で大変重要であるとも思われる⁽³⁾。

二上山は、北側の雄岳（575m）と南側の雌岳（474m）の双耳峰であり、近世期には二子山とも呼ばれていた。雌岳の方には葛木二上神社があり、ここには祭神として豊布都霊神とよふつのみたまのかみと大国魂神おおくにたまのかみが祀られている。大国魂神とは大国主命のことであるから、やはり三輪山、二上山、喜志宮は大国主命の魂のラインとして東西に一直線に連なっていることが分かる。大国主命を祀る総本宮社としては、出雲大社があげられる訳であるが、ここには大国主命の和魂にぎわみたまが祀られている。出雲の国は、古代には死者の霊が集まる黄泉の国と考えられ、しばしば常世の国、根国と称された場所でもある。また、古来から旧暦十月には日本全国の神々が出雲大社に集結するとされ、旧暦十月のことを出雲のみにおいて「神在月」と呼ぶという伝承もこの地には存在している。こういった観点からすれば、三輪山の大国主命の幸魂、奇魂は、西に進み喜志宮の荒魂と一直線で結ばれ、さらに出雲の国へと進んで出雲大社の和魂と結ばれるという、古代独特の宗教観や神霊観がそこにクローズアップされる。古代において竹内街道は、三輪山から出雲へ向かう古代の道の一途でもあり、いわば魂が帰る安住の道として考えられていたことが覗える。

3、日本武尊と白鳥伝説

さらに古代の神話、歴史が語られる『古事記』や『日本書紀』には、日本武尊やまとたけるのみこと（倭建命）の伝説がある。有名な「倭は、国のまほろば、たたなづく、青垣山籠もれる、倭しうるはし」（『古事記』景行天皇 31）と詠った日本武尊であったが、東国遠征からの帰途、三重の能褒野において力尽きて薨去されることとなった。しかし、その後その魂は白鳥となって、大和、羽曳野、鳳へと飛んだとされる。『古事記』には、

「ここに八尋白智鳥になりて、天に翔りて浜に向きて飛び行でましき。ここにその後及御子等、その小竹の荇杙に、足きり破れども、その痛きを忘れて哭きて追ひたまひき。……かれ、その国より飛び翔り行きて、河内国の志幾に留まりましき。かれ、其地に御陵を作りて鎮まり坐さしめき。すなはちその御陵を号けて、白鳥の御陵と謂ふ。然るにまた其地より更に天に翔りて飛び行でましき。……」⁽⁴⁾

とあり、不遇の人生を終えて白鳥となった日本武尊の魂が、安住の地を求めて大和から堺の大鳥大社に到った描写を読み取ることができる。そして、これに関連する史跡として河内の羽曳野には白鳥陵や白鳥神社があり、その白鳥陵の北側に沿って東西に走る竹内街道は、まさに大和から二上山を越えて真西に飛び立った白鳥の足跡を追うように続いている。先に「太陽の道」を中心とした竹内街道は、三輪山から出雲へ向かう古代の道の一途でもあり、いわば魂が帰る安住の道として考えられていたことを述べたが、この日本武尊の神話を見ても、このラインが古代宗教における魂の安住の地に到るルートであるという特徴が、そこに明確に見えてくるの

である。

4、「王陵の谷」と竹内街道

右の図②は、明日香にある石舞台古墳（左下）の真西からさらに20度ほど北に向けて撮った遠景写真である。石舞台古墳の石室入り口は、明らかに写真右上に遠く聳える二上山に向かって開いていることが分かる。この明日香石舞台から二上山へのライン上には、橿原神宮、当麻の石光



図② 明日香石舞台から見た二上山

寺、二上山を越えて、応神天皇陵、さらに住吉大社などの宗教的遺跡が一直線上に存在する。既に二上山を越えた西側に、魂の安住の地が在るという上古の宗教観があったと述べたが、このことは飛鳥時代の人々にも言えることで、当時の人々の心にも同様の観念があったことが想像される。

明日香から望む二上山を越えた東南の麓に、現在「王陵の谷」とよばれる地域がある。そこには、敏達・用明・推古・孝徳の四天皇の御陵と聖徳太子廟が存在する。『聖徳太子伝暦』などの伝記によれば、622年2月21日に太子妃の膳大郎女が亡くなり、翌22日（『日本書紀』では前年2月5日）太子が斑鳩で薨去され、そのご遺骸はいわゆる太子道を通り、斑鳩から叡福寺の太子廟（陵墓）へ運ばれて埋葬された。この太子廟には、太子の母である穴穂部間人、妃の膳大郎女と太子のご遺骸が納められており、古来から「三骨一廟さんこついちびょう」と言われている。勿論、敏達天皇をはじめ他の三天皇のご遺骸は、明日香から竹内街道を通り、「王陵の谷」の各御陵に運ばれて埋葬されたと考えられる⁽⁵⁾。そういった意味では、竹内街道はいわば飛鳥時代の王族の葬送の道でもあった訳であるが、これは明日香から見て、二上山を越えた西側にあるこの地域が、当時は王族の魂が眠る安住の地と考えられていたからであろう。

5、浄土思想と二上山

日本に浄土思想が伝播するのは、奈良時代である。法隆寺にある橘夫人念持仏の厨子は、阿弥陀三尊のブロンズ像であり、その像の下には極楽の蓮池がレリーフとして描写されたものとなっている。橘夫人とは、光明皇后の実母である橘三千代のことであり、すでに奈良時代初期にこのような貴重な阿弥陀信仰の造像がある以上、当時の貴族階級にはそれなりの浄土信仰が浸透しはじめていたことが覗える。

さて、二上山の東にある当麻の里には当麻寺がある。この寺の山号は二上山であり、その創建は、聖徳太子の異母弟である麻呂子王とされ、7世紀にはこの寺が存在したことが知られる。伝説では中将姫（747～775）が浄土曼荼羅を織りあげ、この寺に奉納したとされ、今日では当麻曼荼羅の寺として多くの観光客が訪れている。この当麻曼荼羅は、いわゆる浄土変相図であり『観無量寿経』に説かれた内容を図式化したもので、観経曼荼羅とも呼ばれている。この

当麻曼荼羅の原本は、錦で織られたものであり、近年では中国で制作されたものとの説もでて
いる。

河原由雄氏の考えによると、この当麻曼荼羅の発願者は藤原百能とする説が最も有力とされ
ている。この藤原百能とは、藤原麻呂の娘であり後に藤原豊成（703～765）に嫁ぎ、中将姫
を生んだ人物なのである。また同氏は、

「百能は夫豊成の没後（765年）、後宮の要職にあったが、また768年から778年の正三位
時代、興福寺東院東堂に、夫豊成、父麻呂、母当麻氏の往生因のため、塑像阿弥陀仏を造
り一切経を施入することがあり、……この種の織仏、繡仏の類が中国に於いても女性の発
願になる場合が多いこと、また奈良時代の阿弥陀信仰が、故人の追善を目的とした事例の
多いことと勘案して、いかにも女性の発願にふさわしい仕様と思える。さらに天平宝字四
年（760）に没した光明皇后は、百能の叔母に当たり、その齋会には、阿弥陀浄土変相図
が奉懸されていたことから、これが契機であったかとも思われ、また本当麻曼荼羅の大き
さ、規模から推考して、光明皇后の追善法会のために施入された可能性も百能の周辺事情
を勘案して推定せられる。」⁶⁾

とも述べているように、当麻曼荼羅は百能が光明皇后の魂が極楽へ往生して欲しいという願い
を持って、追善供養のために施入したことが想像される。ここで重要なのは、数ある浄土変相
図の形式の中から、何故に観経曼荼羅が二上山の当麻寺に施入せられたのかということである。
『観無量寿経』には、極楽に往生するための実践行としての、観想（瞑想）の方法が説かれてい
る。これは定善十三観と呼ばれるもので、十三の観想を行いながら、阿弥陀仏が居られる極楽
浄土を、イメージ化して観想していく実践行でもある。そして、その十三の観想の最初にある
のが日想観にっそうかんなのである。この日想観は、西に向かい沈む夕陽を眺めながら、極楽の光相を観想
する重要な瞑想であり、日輪観にちりんかんとも呼ばれるものである。

当時、恐らく国内で最大級の極楽往生の実践を説く『観無量寿経』のマニュアル（図絵）と
も言うべき観経曼荼羅が、この当麻寺に納められたのは単なる偶然ではあるまい。それは恐ら
く、二上山の真西に沈む夕陽を見て、魂の安住の地を願う古代人の心性が、『観無量寿経』に説
かれた日想観の日輪を想い浮かべながら、西にある極楽への往生を願うという浄土思想と見事
に一致したからに他ならないと私は考えるのである。こうして「太陽の道」を中心とする古代
の宗教観や思想が、やがて極楽往生を願う浄土信仰へとスライドし展開することになったので
ある。空海のもたらした密教思想が隆盛を極め、9世紀から10世紀の日本仏教界の様相は、密
教一色で見事に塗り尽くされることになった。しかしこの間も、この二上山を中心とする麓の
当麻の里には、観経に説かれた極楽往生への浄土信仰の色彩は色濃く残り、やがてそれは浄土
信仰のメッカへと展開するが、それが明確になるのは、貴族社会が崩壊し武士階級が台頭して、
末法到来を予感させる平安時代中期以後になってからであった。そしてそこに登場するのが、
源信である。

日本の中世浄土教の先駆となった源信（942～1017）は、この当麻の里の出身であった。現
在この地域には良福寺という地名があり、この地にある阿日寺付近で源信は生まれたとされて
いるのである。後に源信は比叡山に登り、横川の恵心院に隠遁修行をすることとなり、寛和元

年（985）に『往生要集』三巻を著す。この書が当時の浄土教の嚆矢となって、その後の中世浄土教の発展に大きな影響を及ぼしたのであった。この『往生要集』は、いわば極楽往生の方法論を明確に述べた書籍であるが、その方法論的内容が実は『観無量寿経』に説かれた観想の実践論を大いに取り入れた内容となっている⁽⁷⁾。

ところで、中世の阿弥陀仏の絵像の一つに山越阿弥陀図（山越阿弥陀図）というのがある。下掲の図③は、京都東山にある永観堂禅林寺に所蔵された国宝の山越阿弥陀図である。現存する山越阿弥陀図は、鎌倉期以降のものとして、その代表的な作品が、国宝として京都の永観堂と金戒光明寺に伝存する。この絵の多くは、二こぶの山の谷間から阿弥陀仏が立ってこちらを覗き見するという形式になっている。特にこの永観堂の図について東京国立博物館の解説文には、

「画面左上に『阿』という大日如来を象徴する梵字があることから、ここに描かれた阿弥陀如来は大日如来と同体であるということが暗示されていると考えられます。これらによって、この図の世界は阿弥陀如来の浄土であり、同時に大日如来の浄土でもあり、それは私たちの住む穢れたこの国土にほかならないとする密教的な浄土観により本図が描かれたことがわかります。」⁽⁸⁾

とあり、この作品自身は13世紀に画かれたものとしながらも、密教的な思想の影響を受けた阿弥陀仏としての古い形式の構図であることが推測される。大日如来（Mahāvairocana）は、太陽を意味する宇宙の根源的な仏であるから、この図は西に沈む夕陽そのものが、阿弥陀如来と具現化して衆生の世界に救済を訪れる姿として捉えることができる。

ところで、室町時代の日記『宣胤卿記』（1519年5月末）の記事によると、四天王寺の西門西脇壁に描かれていたという恵心僧都源信筆の山越阿弥陀図を写した三条西実隆の所蔵する来迎図の阿弥陀の白毫に、聖徳太子が勝鬘経講讚の時、毎日行水に使う水を浄めるために、法隆寺の井戸に沈めたという珠をそこにはめていたという⁽⁹⁾。この記事を見ると、室町時代に四天王寺の西門西脇の壁には、源信が画いたとされる



図③ 山越阿弥陀図

山越阿弥陀図があったことが分かる。そして、この記事の内容が事実であるとするならば、時代的な背景や浄土信仰の展開を考慮すれば、山越阿弥陀図の原図は、やはり源信によって構想されたものであった可能性は極めて高い。

先にあげた図①の二上山の谷間に沈む風景は、源信が生まれたとされる良福寺方面から撮った写真である。出家して叡山に登る年齢が、当時は大凡十四、五才であったことを考慮すれば、幼少期十四才頃までの源信は、しばしばこの写真と同じ光景を目にしたことであろう。しかも、当麻曼荼羅ゆかりの当麻に育った源信の心には、日が沈む西にある阿弥陀仏の浄土の世界に対する崇信の念が強くあったことは想像に難くない。

そういった意味では、源信による山越阿弥陀図は、むしろ若き頃に二上山に沈む夕日（日輪）を眺めていた源信が、阿弥陀仏の救済の姿（象徴）として自らの心に想起し得た構図であったのであろう。この絵こそが、言わば「太陽の道」の上にある二上山の西に魂の安住の地があると考えた古代独自の宗教観を、中世浄土教による西への極楽往生の思想へとスライドさせる、つまり古代にあった死者の魂の二上山越えの思想から極楽往生への浄土信仰への転換を示す証左に他ならないと私は推考するのである。

6、太子信仰と念仏聖

『上宮太子菩薩伝』や『聖徳太子伝暦』といった伝記には、聖徳太子が救世菩薩や観音化身として描写され、太子が観音や菩薩の化身であるとする信仰が奈良時代から芽生える。やがて中世には、聖徳太子が観音（如意輪観音）の化身であるという信仰が法隆寺などには見られ、古来より同寺では「南無観音化身上宮太子」と太子の名号を唱えている⁽¹⁰⁾。一方で、観音菩薩が阿弥陀如来（本地）の脇士であることに起因して、太子信仰は阿弥陀仏を崇敬する浄土信仰とも深く結びつくこととなる。

『日本往生極楽記』（985年頃）は、慶^{よししげのやすたね}滋保胤（～1002）によって著されたものであるが、これは我が国で最初に記された極楽への「往生伝」でもあった。保胤は源信とも交友があった人物であり、両者は叡山で二十五人の僧侶が集い極楽往生を願う念仏結社である二十五三昧会（986年）に深く関わっている。この典籍には、それまでに日本で極楽往生を遂げた四十数名の伝記が列挙されているが、実は聖徳太子が日本で最初に浄土に往生した人物としてここに記されている。このことは極めて重要なことであり、その後多くの念仏聖が太子を尊崇し、太子信仰が大きな発展を見せることとなった。

さらに、寛弘四年（1007）に四天王寺の金堂から聖徳太子の真筆とされる『四天王寺縁起』（御手印縁起）が発見され、四天王寺の宝塔・金堂の伽藍は「極楽土の東門の中心に相い当れり」という思想がこれより広がることとなる。四天王寺が、浄土信仰の聖地と位置づけられ、多くの念仏聖がここに集まり天王寺別所を形成し、やがて鎌倉時代には西門の石鳥居が建てられ、その扁額に「釈迦如来 転法輪処 当極楽土 東門中心」と刻される。この偈文の内容は『今昔物語』や『梁塵秘抄』などにも記され、今様にも詠われて人口に膾炙されるなど、四天王寺は浄土信仰の一大拠点となった⁽¹¹⁾。この『四天王寺縁起』の出現によって、浄土信仰の一潮流が起こる訳であるが、さらに不思議な出来事とその半世紀後に、先に述べた「王陵の谷」にある叡福寺（太子廟）で起こったのである。

天喜元年（1053）に叡福寺の住僧が、太子廟の近くに私堂を建てようとしたのであった。ところが住僧の夢に「建ててはならぬ」とのお告げがあり、一度は踏みとどまり、翌天喜二年（1054）の9月20日に太子廟の坤（南西）に石塔を建立しようとしたところ、地中より1尺5寸の箱が出土して、中から『太子御記文』と石に刻んだ「廟軀偈」が現れた。その偈文には「（この地が）過去七仏の法輪の所、大乘相応の功德の地なり。一度参詣すれば悪趣を離れ、決定して極楽界に往生せん。」（松子伝）と記されていたのである。当時の四天王寺の別当であった桓舜にこの事が知らされ、桓舜は現地検分に赴き出土品を確認している⁽¹²⁾。この太子廟に



図④ 太子廟に参詣する聖たち

「一度参詣すれば、地獄に墮ちることではなく、必ず極楽に往生できる」という偈文の内容は極めて重要である。この「廟岨偈」の発見により、この太子廟が大乗仏教が説かれた遺跡となり、ここに参詣することによって必ず極楽に往生できるという聖地となったのである。またこれ以降、この石文発見の珍事の噂が大衆に広がり、多くの念仏聖が救いを求めて太子廟に詣で、参籠までするという新しい信仰（太子信仰）の流れも起こったのである。

親鸞上人が、まだ範宴と名乗っていた青年期、建久二年（1191）に60日間法隆寺に逗留し、因明を修学したことがあった。法隆寺からの帰路、当麻寺に詣で竹内峠を越えて、9月13日から太子廟に3日3夜参籠したのであった。その2日目夜半に奇瑞の夢告があり、偈文を得たということが、『親鸞上人正統伝』（良空撰）に記載されている。

また西大寺の叡尊律師も、寛元四年（1246）2月に太子廟において502人に菩薩戒を授け、5月8日より6月8日までの1ヶ月間、最勝王経を転読、講讃して国家の安穩を祈願している。さらに一遍上人も弘安九年（1286）には四天王寺、住吉大社、太子廟、当麻寺を巡拝したとされ、太子廟に3日3夜参籠して奇瑞を得て鏡を奉納し、次いで当麻寺に詣でて当麻曼荼羅を拝み、同寺の住僧の聖から『称讃浄土経』一卷を得たことが『一遍聖絵』に記されている⁽¹³⁾。

このように、多くの念仏聖が太子廟に詣で参籠をして、好相や夢告という奇瑞を受けるといふ独特の信仰形態が、鎌倉期にはできあがった。それは、太子信仰が浄土信仰をもとにした念仏聖の滅罪と往生の証としての奇瑞体験を得るための実践修行ともなっていたのである。こうして四天王寺から太子廟を訪れ、さらに当麻寺に詣で往来するというルートがここに形成され、竹内街道は言わばこのような浄土信仰、太子信仰の道として念仏聖が行き交う「聖の道」といふ側面を持つようになったのである。

まとめ

以上述べたように、二上山を中心にした「太陽の道」とよばれるライン上には、古代には二上山の西に魂の安住の地があると考えた独特の思想や宗教観が見られた。そしてそれが、中世浄土教による西への極楽往生の思想、浄土信仰へと大きく転換したのである。その変革期に登場したのが、二上山の麓の当麻の里に生まれた恵心僧都源信であり、その思想的、宗教的な転換の象徴が、山越阿弥陀図の構想に見いだされるとここに推論づけた。一方、当麻曼荼羅を中心とした浄土思想の萌芽は、やがて当麻から舞台は極楽の東門中心とされる四天王寺へと移り、末法思想に伴う大きな社会変革に相俟って、そこに念仏聖の活発な動きが起こり、彼らの信仰

と活動の中で、太子廟を中心に太子信仰に新たな展開を見ることとなった。本稿では、二上山を巡る竹内街道という所に焦点をあてながら、そこに見られる古代から中世における聖徳太子信仰までの思想的、宗教的変遷の特徴を概観して論説した次第である。

〔註〕

- (1) 『古代の鉄と神々』真弓常忠著 pp. 41-42 より引用、参照。
- (2) 前掲書 pp. 51-52 より引用、参照。
- (3) 「太陽の道」の二上山を中心に、西の大坂側の丹南（丹比道の南部）地区は、古来より鉄の製錬の地であり、中世には河内鑄物師が活躍した地域となっている。また、東の奈良側にある五位堂地区も、中世以降はその鑄物師集団の活動が見られる場所である。「太陽の道」は、鉄や金属の製錬に深く関係しているラインとも考えられ、真弓氏の大国主命と製鉄との関係説は大変興味深いところである。
- (4) 『古事記』（中）次田真幸訳注 pp. 167-168 より引用、参照。
- (5) これら四天皇のご遺体は、確かに竹内街道を通ったであろうが、竹内峠を越したのではなく、竹内峠から当麻にいたる山道（当摩径）^{たぎまみち}は急勾配のため、当麻から北に進み穴虫峠へと迂回して（大坂道）、太子町山田付近を経て王陵の谷に到ったものと推測される。
- (6) 『当麻寺』河原由雄著 pp. 154-155 より引用、参照。
- (7) 『往生要集』の成立・内容については、石田瑞麿氏の『源信』（日本思想大系6）p. 427 以下の解説文を参照。
- (8) 東京国立博物館の解説文 [国宝山越阿弥陀図・2019年2/13～3/10まで同館2階に展示] (https://www.tnm.jp/modules/r_exhibition/index.php?controller=item&id=5375) より引用、参照。
- (9) 龍谷大学オープンリサーチ、1. 国宝山越阿弥陀図解説文（副センター長・鍋島氏）、(https://buddhism-orc.ryukoku.ac.jp/old/ja/exhibition_ja/20031020-20031219_001_002_001_ja.html)、また『宣胤卿記』中御門宣胤 [著]（増補史料大成／増補史料大成刊行会編、45）臨川書店 [1965年] など参照。
- (10) 『聖徳太子の生涯と信仰』高田良信編著 pp. 69-72 など参照。特に、同寺の夢殿に安置されている救世観音（奈良時代）は、太子が法華経を重視されたことと、南岳慧思の後身であるとの説が相俟って造像されたものと考えられるが、救世観音が太子の本体の姿であるとも伝承されている。
- (11) 四天王寺縁起については、「四天王寺御手印縁起について」西光義遵（『太子信仰』蒲池勢至編・所載）を参照。西門の石鳥居は、永仁二年（1294）に忍性律師によって建立され、現在の西門扁額は嘉暦元年（1326）の鑄刻とされる。「釈迦如来転法輪処・当極楽土東門中心」川岸宏教（前掲『太子信仰』所載）も参照。
- (12) 「磯長太子廟とその周辺」西口順子（前掲『太子信仰』所載）pp. 49-51 参照。
- (13) 前掲書 pp. 63-64 参照。『興正菩薩御教誠聴聞集』長谷川誠編 p. 251 参照。また『一遍聖絵』大橋俊雄校注 pp. 91-94 参照。

浄土宗西山派の証空は、承元二年（1208）に法然の勧めで、叡福寺に止住する願天に止観修学するため太子廟を訪れている。証空は後に当麻寺にも詣で、『当麻曼荼羅註記』10巻、『当麻曼荼羅供式』1巻、『当麻曼荼羅八講論義鈔』1巻などを著したとされ、当麻曼荼羅とその信仰の普及に努めている。また、『とはずがたり』の作者である二条（女房）も、正応三年（1290）10月に大和へ赴き、春日大社、法隆寺、次いで当麻寺に詣でて当麻曼荼羅を拝し、叡福寺太子廟へ参詣して如法経供養をして結縁している。また二条は、嘉元三年（1305）5月にも太子廟に参詣して、大品般若経二十巻を奉納している。（「磯長太子廟とその周辺」西口順子 p. 51、p. 52、p. 65 参照）このように、当時は太子信仰が

貴族階級にも強く浸透していたことが窺える。

【参考文献】

- 『大和の原像』 小川光三著（大和書房・1973年）
- 『古代の鉄と神々』 真弓常忠著（ちくま学芸文庫・2018年）
- 『古事記』（中） 次田真幸訳注（講談社学術文庫・2008年）
- 『竹内街道』 上方史跡散策の会（向陽書房・1988年）
- 『当麻寺』 松島健・河原由雄共著（保育社・1988年）
- 『源信』 石田瑞麿編（日本思想大系6・岩波書店・1970年）
- 『往生伝・法華験記』 井上光貞編（日本思想大系7・岩波書店・1974年）
- 『興正菩薩御教誠聴聞集・金剛仏子叡尊感身学正記』 長谷川誠編（西大寺・1990年）
- 『一遍聖絵』 大橋俊雄校注（岩波文庫・2000年）
- 『一遍聖人と聖絵』 高野修著（岩田書院・2008年）
- 『聖徳太子の信仰と思想』 瀧藤尊教著（善本社・1998年）
- 『聖徳太子の生涯と信仰』 高田良信編著（小学館・1991年）
- 『太子信仰』 蒲池勢至編（雄山閣出版・1999年）

【図】

①②個人撮影。③山越阿弥陀図（永観堂・国宝）、原色日本の美術・第7巻『仏画』高田修編著（小学館・1997年）p.144より引用。④『一遍上人絵伝』小松茂美編（中央公論社・1978年）p.227より引用。写真は一遍上人と念仏聖たちが、太子廟に詣でて参拝している絵図。

The Faith in Prince Shotoku and 'The Sun Road'

Atsuo Fujitani

On the line 34 degrees 32 minutes north, the ruins and shrines of the Sun Faith are lined from east to west, centering on Hashihaka tomb (箸墓古墳). This line is called 'the Sun Road' (太陽の道) like the so-called ley line.

If the width of this line is considered to be a band of about 100 meters, to the west of it are Funaki-ishigami shrine (舟木石上神社) and Ise-kuruma shrine (伊勢久留麻神社) in Awaji Island, Otori-taisha shrine (大鳥大社) in Sakai City, Mt. Nijo (二上山) on the prefectural border between Osaka and Nara, and Oh shrine (多神社) in Tawaramoto town of Nara prefecture, to the east are Hashika tomb and Mt. Miwa (三輪山) in Sakurai city, Hasedera temple (長谷寺), Muroji temple (室生寺), and Itsuki Palace (齋宮) in Mie prefecture.

Although it seems that some historians consider Hashihaka tomb to be the central point of the Sun Road, I guess in fact the important point of this line is Mt. Nijo.

The Okuninushi's (大国主命) bliss and miracle soul in Mt. Miwa go to the west on this Sun road, and it is linked with his rough soul of Kishinomiya (喜志宮) in Tondabayashi city. Furthermore it advances to the country of Izumo where the world of the dead is supposed to be. The characteristic view of the religion that his soul is to be eventually connected with the harmony soul of Izumo Taisha (出雲大社), that is unique to ancient times, is highlighted there. Takenouchi road (竹内街道), an ancient public road built parallel to the Sun Road was part of the ancient way from Mt. Miwa to Izumo. And it can be imagined that it had been thought as a way for the soul to return for its relief and settlement in ancient times. This also applies to the myth that Yamato-takeru's (日本武尊) soul became a swan and flew this line west.

In the Middle Ages, the view of the religion was transformed into the Pure Land beliefs (浄土信仰). It is Genshin (源信), who was born in the village of Taima (当麻里) at the foot of Mt. Nijo, that appeared in the period of the great revolution. I inferred here that the symbol of the philosophical and religious transformation can be found in Yamagoshino-amida figure (山越阿弥陀図) conceived by Genshin. On the other hand, the center of the Pure Land thought that took place by Taima-mandara (当麻曼荼羅) conclusively moved from Taimadera temple (当麻寺) to Shitennoji temple (四天王寺), which was considered to be the center of the east gate of the Pure Land.

The active movement by the Nenbutsu saints (念仏聖) happened. In their faith and activities, we saw a new development on the faith in Prince Shotoku, centering on his sepulcher (太子廟). In Kamakura period, a unique form of faith was created in which many Nenbutsu saints visited and stayed there to receive the revelation and the miracle of dreams. It was also a kind of practical training for the Nenbutsu saints to obtain the experience of miracle in proof of the disappearance of the sins and the rebirth to Pure Land.

In this way, a route from Shitennoji temple to Taimadera temple via the sepulcher of Prince Shotoku was established here. Takenouchi road has come to have the aspect of 'Sacred Road' (聖の道) where the Nenbutsu saints come and go as such a road of the Pure land beliefs and the faith in Prince Shotoku.

keywords : The Faith in Prince Shotoku (聖徳太子信仰), The Sun Road (太陽の道)
Mt. Nijo (二上山), Takenouchi Road (竹内街道)

